
FAIRYTAIL ~過去の記憶は未来の希望へ~

マクレーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F A I R Y T A I L ~過去の記憶は未来の希望へ~

【NNコード】

N4769Z

【作者名】 マクレーン

【あらすじ】

大事な仲間を殺された

復讐の為に生きようと決めた少年は、新たな仲間に出会った。

フェアリー テイルで少年は変わる

基本的には主人公サイドで原作に沿って進めます。オリ話もあります。

オリキャラ紹介 part 1 (前書き)

更新しました

オリジナルキャラ紹介 part 1

名前：スピアード・フルミネ

愛稱：スピア

性別：男 年齢：現在20歳
FT加入時14歳

好きなもの：仲間
睡眠
アオイ

嫌いなもの：闇ギルド 不眠

魔 法	魔 法
追 憶	追 憶
劍 閃	劍 閃
縱 橫	縱 橫
雷 神 劍	雷 神 劍
車 軸	車 軸
劍 先	劍 先

雷系魔法

レイシングボルト テクサスの技 直接テクサスから教わった

西手に紫電を貯め刀にまとわせ、柄と切先を両手で持ち投げる。

紫電拳をあわせた拳で、相手を連打で殴りつける。

容姿

金髪のツンツンした髪

ル 大せうとうといふ由色の二
口一の下二黒のソヤツ

首には十字架のネックレス

紋章は首の左側

名前：アオイ・アクナス

年齢：享年14歳

性別：女

好きなもの：甘いもの スピアード

嫌いなもの：虫

魔法：剣技 水系各種魔法

容姿

茶髪のボブ

ヘソだしTシャツ

デニムのショートパンツ

剣の使い手。6年前、闇ギルド黒い天使達に殺害された。
ソウルエンジェルズ
魂転生の効果で意識だけが、刀に残った。

禁忌魔法

名前：ガンマ・ゲレム

年齢：現在20歳

性別：男

好きなもの：金

嫌いなもの：酒 タバコ

魔法

ガスマジック

パライズフリット

フレイターフリット

サンダーフリット

アクアフリット

水流弾

雷弾

貫通弾

敵を痺れさせる魔法の弾丸

火属性の弾丸

水属性の弾丸

雷属性の弾丸

硬い装甲も貫通させる弾丸

容姿

白髪で長身

ファー付きの白いコート

紋章は背中 蛇姫の鱗

黒いズボン

オリキャラ紹介 part 1 (後書き)

はじめまして！
人生初小説です。
いたらないところもあると思うので、ご指導の程よろしくお願いします。

フェアリー・テイル加入

マグノリア

一つの建物の前に一人の少年が立っていた。

「ここが…フェアリー・テイルか」

背負っている刀は少年の体より長く、刃先は地面についている。

刀の柄を握り目を閉じる。

「入らないの？」

声が聞こえるが周りには誰も居ない。気のせいではない。

そう、刀が喋っているのだ。

「ん？ああ、お前の事どう説明するかを考えてたんだ」

そう言いつつ、ギルドの扉を開けた。

扉を開けると、騒音とともに熱気が顔を襲った。

少し歩くと、数人が少年に気づき静まった。

「見ない顔だな……誰だ？」

その声が聞こえたが、気にせぬ歩く。

カウンターの所に座っている老人に、他と違う何かを感じた。

「すみません、フニアリーテイルところギルドはここですか？」

「アハ。お前さんは誰じゃ？」

「スピアード・フルミネです。スピアと呼んでください」

「では、スピア。お前さんはなぜここに？」

「あの、このギルドに入りたいのですが……」

「ああ、構わんよ。来る者拒まずじゃ」

「ありがとうございます」

「ワシは」のギルドのマスター・マカロフじや。まあ、『風魔』にやつていけい

「解りました。よろしくお願ひします」

と、握手を交わす。

「ところでスピア。お前さんはどんな魔法を使ひのじや？」

「剣技なら誰にも負けません」

「ふむ、大した自信じや。どれ」「オレと勝負しないーーー……」

マカロフの話の途中に駆けてきた少年がいた。

桜色の髪にツリ目。鱗のようなマフラーをしている。

「君は？」

「オレは、ナッシだ。よろしくなー。」

と、少年は笑った。

「あ…スピアード・フルミネです。スピアと呼んで下さー。」

「よしースピア、オレと勝負しろー。」

いやいやいや……起きなりかよー。

「おにナツ。そういうのは後にしる」

スピアの後方から、声がした。

見ると鎧を着た、赤い髪の少女がいた。

「スピアと云つたな。私はエルザだ。よろしく頼む」

随分としつかりした人だな

「うわいよろしくお願ひします」

エルザと挨拶をすると、他のメンバーも集まってきた。

「オレはグレイ・フルバスターだ。よろしくな

「よろしくお願いします。つて……何でパンツ一丁なんですか？」

「まつ…しまつた！」

「アアアアア」

パンツ一丁のグレイを見てナツが笑っている。

「なんだよーツリ田ー。」

「あー…やんのかタレ田変態ー。」

うわ。ケンカかよ

「あの、ケンカ…」「やめんかあー」…ふじつー。」

バキッ！

ボコッ…

ナツヒグレイのケンカを止めようと、ヒルザが割り込んだが

近くにいたスピアまで巻き込まれた。

「まつたくーお前らは礼儀をわきまえたひだりー……ん、ひだりたスピア？」

「い……痛てええ

「い……いや、大丈夫です……」

「そりゃ。ならいいんだが」

何だこのギルドは……

「新入りだつてえ？」

白い髪にポニー・テール、へそ出し少女が現れた。

「相手してあげるよ。かかつてきな

うわ、不良だ

「よせ!! ハ。お前じや勝てない

「アア？ やんのかヒルザアア！！！」

「上等だー!! ハ、かかつてこいー！」

いやいやいや。あんたらもケンカかよー！

バキッ！

ボコッ！！

「つて……誰も止めないんですか？！」

慌ててマカロフに聞いてみたが、

「反発するのは認め合つから」。奴等には互いの顔がハッキリと映つてゐる。なーんも心配する」とないわい

ダメだ。
仕方がない

..... ፳፻፲፭

大きく息を吸う。

卷之三

スピアの大声とともにギルド内が静まる。

静批ひづけ

新入りのくせに偉そうにしてんじゃねえええ！！

三)か近くにあつたガラスの「ツ」ノを投げつけた

しかしそれはアビアの目の前で粉々に砕けた

一
何
？

ギルド中が騒然とする。

「い、今、何が起きたんだ？」

エルザが驚き、誰ともなく言つ。

「無数の剣戟を一瞬にして……見事」

トマカロフが叫ぶ。

刀を背中に戻し、一息つく。

「…………ふう」

周囲の視線がスピアに集まっている。

あつーまたやつちまつた……

「　　スゲヒヒヒヒ……」「　　

えつ？

「スピア、スゲエな！オレにも教えてくれよー。」

「馬鹿か、お前にできるわけねえだろナツー。」

「やつてみなきや、わかんねえだろー。」

バキッ！

ボコッ……

「……本当に騒がしいギルドですね」

「ああ。だが、ここになると心が安らぐ。そつだろ？」

エルザに問われ、スピアは迷うことなく答えた。

「はい！俺、このギルドに来て良かったです」

「…………よつこーそー！妖精の尻尾へー！」

フェアリーテイル加入（後書き）

いやあ、難しいですね。

ルーシィ加入まで過去話です。

蛇姫の鱗と闇ギルド

闇ギルド白い虎ホワイトタイガ

「な……何なんだコイツ」

震えた両手で銃を持ち、銃口を田の前の人物に向けていた。

金色のシンシンした髪

ルーナセラフイといふ田色のパートのような服の上下

そのパートの下には黒のシャツ

首には十字架のネックレス

そして妖精の尻尾のマーク

「どうする？大人しく軍隊に捕まるか、俺に倒されるか好きな未来を選べ」

「ひつ……つわあああああああ！…」

持っていた銃の引き金を引いた。

同時に弾丸と金属がぶつかる音がした。

弾丸は建物の壁に突き刺さった。

目の前の人物は刀を抜いていた。

「や……やめてくれ……「雑魚は修行に励め」……えつ？」

ドスツ

銃を持つている男の腹を殴り気絶させる。

マグノリア

「ん？スピアじゃねえか」

後ろから声がした。

「ああ、ナツ。仕事終わりか？」

俺がフェアリー・テイルに入つてから、半年がたつた。

相変わらず、うるさいギルドだが楽しくやっている。

「あい。ナツ、また街を壊したんだよ」

ハッピー。3ヶ月前にナツが拾ってきた卵から生まれた青い猫だ。

「やあ、ハッピー」

「スピアは何の仕事に行つてたの？」

「……闇ギルド潰しだ」

「スピアはホント闇、ギルド潰しが好きだよね」

「好きではないけどな」

そんなこんなでギルドについた。

「おお、スピア。仕事はどうじゅつた」

ギルドに入るなりマスターであるマカロフが訊ねてきた。

「まあ可もなく不可もなくです」

「そうか」

マカロフは酒を飲む。

「グビッグビップハー」

「じつちやん！オレには何も聞かないのかよーー！」

ナツが口から小さな火をはきながら囁つ。

「ん？ナツぅ！また仕事先で街を壊しあつてー！」

マカロフとナツの会話を聞きながら、リクエストボードに近づく。

リクエストボードには沢山の依頼書が貼ってある。

『邪竜退治』

『深海の宝探し』

三枚の依頼書をとり、マカロフの元へ向かう。

途中ナツとすれ違った。

「仕方ねえ、仕事行くかハッピー」

「あいー。」

「マスター。この三つ頼んで、3日で終わらせます

「何じゃ？ もう仕事に行くのか」

「さつきの仕事で遠方まで行つたので、金欠なんです」

「そうか。しかし、お主に頼みたい仕事があるんじや」

マカロフは酒入りコップをカウンターに置き去つた。

「闇ギルド夜の王ナイトキングを知つてあるか？」

その名を聞いたとき顔つきが変わつたことに、自分でも気づいた。

「バラム同盟黒い天使達の傘下の一つですねブラックエンジェルズ」

先日、俺が潰した白い虎ホワイトタイガーも傘下の一つだ。

「せうじや。そのギルドを蛇姫の鱗と妖精の尻尾で倒す」とこなつた

「夜の王程度のギルドなら俺一人で大丈夫ですよ」

見栄ではない。実際、ホワイトタイガ白い虎より規模が小さい。

「詳しいことは判らんが、禁忌魔法を使い何かを企んでおるようなのじや」

禁忌魔法。歴史から抹消された、禁忌の魔法。

その言葉を聞いた途端、俺の体の震えは止まらなかつた。

「…解りました。俺が行きます！」

「出発は一日後。ハルジオン集合じや」

マカロフがそう言い、カウンターにある酒入りコップをとり一杯飲む。

蛇姫の鱗と闇ギルド（後書き）

突如思いついた話ですが、ちゃんと考えてあります。
次回、スピアの過去について少し触れます。

禁忌魔法

ハルジオン

「潮風がいいなあ～」

港町のハルジオンは海から陸に向かい風が吹いている。

「ふわあ～。眠い」

大きなあぐびをした後、ポケットから紙切れを取り出す。

蛇姫の鱗リミアスケイルからの選抜者の特徴が書いてある紙だ。

「マスター、もっとわかりやすい特徴を書けよな。白髪の男だけじや解るわけないじゃん」

紙切れから目を離し、周りを見渡す。

「あれかな？」

後方にいた、白髪の男に話しかける。

「あの～リミアの方ですか？」

その男はスピアのに顔を向ける。

「ん？ああ」

その男も紙切れを見ながら言った。

その紙切れには、スピアの特徴がしっかりと書いてあった。

「妖精の尻尾のスピアードです。よろしくお願ひします」

軽く頭を下げる。

「蛇姫の鱗のガンマだ」

ガンマは言った。

「ガンマさん、今回の依頼について何か聞いていますか？」

「依頼主は地方ギルド連盟。報酬額は八万」。依頼内容は闇ギルド
ナイトキング
夜の王の行おうとしている事の解明と阻止

ガンマは淡々と語った。

「他に何か知りませんか？」

「……他に？」

怪訝そうな顔をしている。

「禁忌魔法についてです」

「いや、何も知らない」

ガンマはそう言い歩き始めた。

「あやあああー。」

突然、女性の叫び声が聞こえ振り向いた。

「誰か、カバンを取り返してええーー。」

ひつたくりか。

スピア達と同じ方向に走ってきたので止めようとするが、ガンマに止められた。

「よせ。ここでひつたくりを捕まえたら、軍隊に引き渡さないといけない。時間がかかる」

「田の前で犯罪を見て、ほっとけって言つんですかー。」

「俺はこの後も仕事があるんだ。時間をとらせるな」

「仕事はキャンセルすればいいじゃないですかー。」

すると、ガンマはスピアの胸ぐらをつかんだ。

「あのな、俺たちは魔導士だぞ。金にならない仕事をしてびつかぬんだ」

「金になるならないが大事じゃないだろー。」

「話にならない。勝手にしろ、俺は先に行く」

「勝手にしますよ」

しばらく睨みあつた後、ガンマはスピアの胸ぐらを離し歩いて行った。

「何なんだよ、アイツ」

スピアはそう言いながら、じかにに向かって走っていくひつたくり犯の腕をとり、投げ飛ばした。

「うお？！」

「金、金つるさいんだよー！」

ひつたくり犯を蹴る。

「なつ…なんだよー！」

「うお？」

「う」苦労様です

軍隊に犯人を引渡す。

「すいません。魔導士さんに『迷惑をおかけして』

おそらく新人であろう軍人が言つ。

「いえ。魔導士も軍人も関係ないですよ」

「何かあれば言つて下さい。ご協力します」

その軍人が敬礼をしながら言つ。

「じゃあ、一つお願ひしていいですか？」

「どうぞ」

敬礼をやめる。

「闇ギルド^{ナイトキング}夜の王についてです」

「解りました。」^{シリカヘビウゼ}

軍人が歩き出す。

「あ、あの。あなたの名前は？」

「ミハエルです。あなたは？」

「フェアリーテイルのスピアードです」

ミハエルから聞いた情報を頼りに、ハルジオンの北西にある夜の王^{ナイトキング}に向かつた。

ギルドの周りは岩場で、周囲には何もない。

ギルドの真正面にある大きな岩陰に、ガンマが居た。

「ガンマさん。何か変わった様子は？」

後ろから話しかけられたガンマは、スピアだと気づくと一瞬戸惑いながらも答えた。

「……特に何もない」

ガンマの横にしゃがみ、岩陰からギルドの様子を見る。

しばらくすると、ギルドの中から人が大勢出てきた。

「あれは？」

スピアは横にいる、ガンマに聞いた。

「夜の王^{ナイトキング}の連中だろうな……真ん中の上半身裸の奴がいるだろ」

ガンマが指を指す。

「はい」

「あいつは、ファイ。夜の王^{ナイトキング}の実質的なリーダーだ。奴は元々巨人^{ノーズ}の鼻つてギルドに所属していたんだが、金の亡者でな。依頼料が高い、暗殺依頼……本来はそんな依頼が有ること自体遺憾なことなんだが……ばかりを選び、外道落ちした。」

外道落ち。闇ギルド入りすることだ。

スピアはガンマを見つめる。

「…何だ？」

「いや、よく調べてるなあ～と思つて」

「…金のためだ」

二人がそんな会話をしていると、ファイ達に動きがあつた。

魔導四輪に乗つてゐる。

「ん？ 奴等、どこに行くんだ」

「追いかけましょう」

「ああ」

ファイ達が魔導四輪でハルジオンに向かつたのは、方角で判つたが

スピアとガンマは走りだ。追いつけない。

二人がハルジオンに戻つてきた頃、街は既に夜の王ナイトキングに占拠されていた。

軍や評議院がいたが、皆倒されている。

「見つけたぞ、ファイ！」

ファイは、一階建ての家屋の屋根に立っていた。

「あ？ 誰だ、てめえ」

「俺はフェアリー・テイルのスピアードだ！」

「スピアードだ？……聞かねえ名だなあ。子供は家に帰んなガキウチ」

スピアとファイが睨んでいる間に、ガンマが入ってきた。

「オイ、正面から攻めんじゃねえよ」

スピアの後ろに、ガンマが並んだ。

ファイは、スピアの後ろに居る人物を見た。

「ん？ お前はガンマじゃねえか」

「……」

「どうした？ 俺らの仲間にでもなりに来たか」

「ガンマさん、知り合いなんですか？」

ガンマに聞く。

「知り合いつて程のもんじゃねえよ。『イツはよ、金の亡者として裏社会ではちょっとした有名人なんだぜ』

答えたのはファイだった。

「何度も誘つてやつてんのによ、コイツ『外道にはなりたくない』だとよ。ふざけてるぜ」

ファイが両手を広げ、呆れ顔をしている。

「……ふざけてなんかない」

「あ？」

「ガソーマさんは、ふざけてなんかない！」

大きな声で怒鳴ったのはスピアだった。

「確かに、ガソーマさんは金の亡者なかもしれない。だけど、魔導士として大事なことを知つていた！！」

「大事なことだあ？」

「魔導士の……魔法の力を人殺しなんかに使つちゃいけないって事だ！……」

「知らねえよ、そんな事。……オイ、そいつら殺つちまえ」

ファイは、そつ命令すると屋根の向こうに消えていった。

「あ、待て！」

スピアが叫ぶが、声は届かなかつた。

「ファイさんの邪魔はさせねえ」

命令をされた、闇ギルド団員が言つた。

「殺つちまえーー！」

「つおおおおおーー！」

そつ叫びながら、五十人ほどの団員が攻めてきた。

「……ガンマさん。追つてくださいーー！」

「何？」

「アーッはガンマさんが倒してく下さい。この数は、ガンマさん一人じゃ無理です」

「無理つて…お前こそこそ一人じゃ無理だろ」

「いいから、行つて下さーーー！」

「……分かった。ここは任せたぞ」

そつ叫びつとガンマは走つて行つた。

「おじおい。子供一人で大丈夫なのか？」
ガキ

闇ギルド団員が挑発していく。

「さて。ガンマさんも居なくなつたし…」

そう言いながら刀を抜いた。

「闇ギルド潰し、始めるか

「OK！やつちやつて！！」

刀が喋る。

「行くぜ、アオイ！」

刀の鎬から切先を左手で、なぞる。

「追憶・剣閃！！」

右から左へ、光のような速さで相手を斬る。

「うわあああ！」

これで十人は減ったな

「囮め！..！」

スピアの周りを残りの奴等が囮む。

前後左右から、一人ずつ襲ってくる。

全員、剣を持っている。

スピアはまず、前方の敵を斬る。

次に、右の敵の顎に右足で蹴りを食らわせ

刀を持つ手を背中にまわし、刀で後方からの攻撃を防ぎ

右足の踵で、顔を蹴り

左の敵を斬る。

その間、三秒。

「何だ、コイツ。強ええ」

闇ギルド団員を倒した後、ガンマを追つてハルジオンの街を出た。

街を出てすぐの所に一人は居た。

「ガンマさん！」

そこでは、ガンマが倒れていた。

「……す、すまねえ。コイツには俺の魔法が効かねえ

ボロボロになつた体で、ガンマが言つ。

「口ほどにもなかつたぜ。ソイツ

ファイはスピアに向かつて言つ。

「最後に一度だけ、仲間に誘つてやつたんだがな。そいつ、もう金はいらねえだとよ」

「……？」

「『俺にはもう金は必要ない。今なら金より大事な物が分かる気がするんだ……それは多分、俺という人間を理解してくれる仲間だ！』だつてよ」

スピアはガンマを見る。

「ガンマさん……」

「つたぐ、ふざけてるよな。笑えるぜ」

そう言つた後、ファイが高笑いをする。

「笑えねえよ！」

スピアは、ファイに向かい切りかかる。

「フツ。ロックメイク……」

ファイが右手をかざす。

「シールド
盾！」

ファイの手の前に盾の壁が現れて、スピアの剣戟を防いだ。

「ロックメイク…ハンマー！」

スピアの頭上にハンマーの形をした岩が現れた。

「消えろおおお…！」

スピアは刀を上に掲げた。

「！」の大きさ、大丈夫か？」「

「樂勝、樂勝」

「追憶・十六夜！！」

ズドーン！！

衝撃が走る。

「フハハハ！」

「スピアード！！」

ファイ、ガンマが叫ぶ。

すると、ハンマーの形をした岩が液体のように溶けて消えた。

「な…何？！」

さすがのファイも驚いている。

「……十六夜つて技はな、剣先から無数の分解組織を放出して個体を分解する技なんだ」

「何だと！？」

「さあ、行くぜ！」

ハアアアアアと叫びながら、ファイに斬りかかる。

「クソツ！ ロックメイク…盾！」シールド

「無意味だよ。十六夜！」

ファイの前に現れた岩の盾も、十六夜によつて分解される。

「フェアリー・テイルには氷の造形魔導士がいる。俺より年下だが、お前よりしつかりした魔法を使つぜ」

その言葉はファイには届いていない。

「追憶・剣閃！」

スピアの渾身の一撃がファイに当たる。

「ガハツッ」

ファイはそのまま崩れ落ちた。

「…ファイを倒した？」

ガンマが体を引きずりながら、近づいてきた。

「……大丈夫か？…スピアード」

「ガンマさん、怪我してんだから動かないでくださいよ」

よろけるガンマに肩を貸し、歩く。

「街に軍隊が常駐しているはずだから、コイツを捕まえてもらわないとな」

「そうですね」

「……ね……待てよ……」

後ろから声がした。

振り返るとそこにはボロボロになりながらも立ち上がる、ファイがいた。

「て……てめえらを……るすまでは……」

虚ろな目をしている。

「死なねええええええええ……」

突然叫んだ、ファイに危険を感じた。

スピアは刀を抜いた。

ガンマも、痛みが引いたのか武器である「丁拳銃を取り出す。

「おもしろい……もの……を見せてやる……」

セイツーながら、ファイは傷口の血を指に塗り

体に文字を書いた。

「ローブ文字？」

ガンマが言つ。

文字を書き終わると、両手を合せ呪文を唱えた。

「アメラ・カジヌ・サドル ダゴゲ・ナーバ・バリエ マグリ・ヤ
トメ・ラジゴ」

体に書いた文字が、魔方陣になり浮かび上がった。

「グオオオオオオオオ……」

獣のような雄叫びと共に、ファイの体が変化していく。

両手は細長くなり、先は二つに分かれ針がついている。

下半身はサソリのよう、左右に足が三本づき生え尻尾も生えている。

尻尾の先にも針がついている。

「これが、禁忌魔法なのか？」

ガンマが聞いたが答える事はなかつた。

「フハハハハ！！死ねええええ」

尻尾の先の針が、ガンマに迫る。

見た目はサソリいつことは……毒針？！

「危ない！！！」

ガンマを突き飛ばす。

ブシュツツツ

尻尾の針がスピアに刺さつていた。

「ガハツツツ」

「スピアード！！」

崩れ落ちるスピアをガンマが支える。

「フハハハハ！！！」

サソリのような姿になつた、ファイが高い位置から見下して叫ぶ。

「次は、お前だ」

禁忌魔法（後書き）

過去に触れるまでは書けなかつたので、次回に回します。

あと、雷竜方天戟の件も解決します。

スピアード&ガンマ>ソファイ(前書き)

反省点

- ・今回モンハンみたいだ…

スピアード&ガンマバウファイ

目の前にいる大きな敵に、ガンマは技を連発していた。

「ガンスマジック
バラライズブリッヂ
銃弾魔法・麻痺弾！！」

敵を痺れさせる効果をもつ弾丸だが、ファイには全く効いていない。

「こんな敵、倒せねえよ……

「……あきらめるな」

心の声が見破られたのかと思った。

「スピアード！お前大丈夫か！」

「大丈夫です。毒なんかで、俺は死にませんよ」

そうは言つたが、正直キツイ。

「俺が特攻します。援護してください」

刀を構えて言ひ。

「わ…分かった」

さて、どうやって「イイツを倒すか。

見た目はサソリのファイは、尻尾で攻撃を防いでいる。

つてことは……

「ガンマさん！尻尾に集中砲火してくださいー。」

「分かった！」

そう言いながら、ガンマは二丁拳銃に弾丸を装填する。

「ガンスマジック
銃弾魔法・貫通弾！」

二丁拳銃から放たれた弾丸は、ファイの尻尾に当たるがダメージを受けていない。

「追憶・剣閃！」

右の三本ある足の手前を斬つた。

手応えはある。

「何だア？」

しかし、ファイは無傷だった。

「クソツ！」

「フンー！」

ファイの尻尾の薙ぎ祓いで、刀がとばされる。

「チツ！」

無防備で敵の近くにいるのは危ない。

直ぐに離れようとしたが、尻尾で飛ばされた。

「うわあああつ！！」

「スピアードー！」

相変わらず弾丸を撃ち続けるが、効いていない。

「どうすれば……倒せるんだ？」

「ぬわあああ……」

ガンマが尻尾でどばされる。

「どうすれば……」

バチバチッ

何かの音がした。

バチバチッ

音がした自分の右手を見ると、紫色の雷が鳴っていた。

「これって……まさか？」

武器もなく、ファイの尻尾で狙われているガンマを確認した後

地面に刺さっている刀を手に取る。

刀の柄と切先を両手で持つ。

「頼むぜ……俺の魔法……」

眼を開けると、両手には紫色の雷が鳴っていた。

バチバチッ

そして、その雷を刀にまとわせる。

「いいくせ……」

遠くでは、今まさにファイが毒の尻尾でガンマを刺す瞬間だった。

「届け……！」

刀を槍のように、ファイをめがけて投げる。

紫色の雷をまとった刀は、一直線にファイに向かっていく。

「消えろ…… フゴッ！…」

ファイの右目に刀が刺さった。

刀が刺さつたと同時に、雷がファイの体を包む。

そうか！

「ガンマさん、奴の弱点は雷属性の技です！」

そこへしながら、カツラの二丁拳銃を拾い投げる。

「やハハ、慶行を出す！ 援護してくたぞー！」

房食を一にして、かこへも

住セノ! !

と
し
銃に弾丸を装填した

「銃弾魔法・雷弾！！」

二丁拳銃から放たれた弾丸は防護した尻尾を突き抜け、生身の上半身へしつかり当たった。

その直後電撃が流れる。

「グワアアアアアツツ!!」

苦しむファイの体を昇り、生身の体を殴る。

もちろん、雷をまとわせて。

「ガハツ！」

ファイが血を吐く。

今がチャンス！

連打でパンチを叩き込む。

「ガンマさん！決めてください！！」

苦しむファイから離れ、ガンマに叫ぶ。

「ガンスマジック
銃弾魔法・最大出力！！」

一二丁拳銃が光っている。

「全魔力解放！！サンダーブラッシュ
雷弾！！」

激しい轟音が、ファイの体を襲う。

そして、ファイは音も無く崩れ落ちる。

禁忌魔法が解けたのか、普通の体に戻っている。

ドスッ

ファイとスピアが地面に落ちる。

「……やつた

スピアは振り返り、ガンマを見る。

「やりましたよ、ガンマさん。」

「ああ

ガンマも驚いている。

しばらく、自分達の勝利を喜んでいた。

そうだ…

「ガンマさん。軍隊の人、呼んでもらえますか？」

「ん？ ああ

ガンマが足を引きずりながら、街へ向かう。

そして、スピアは倒れているファイに近づく。

丁度ファイは、目を覚ましていた。

「…俺は、負けたのか？」

「……ファイ。一つ聞きたいことがある

返事はないが、気にせず話す。

「その禁忌魔法、どこで手に入れた？」

ファイは、何かを隠すように顔をそらした。

「…………黒い天使達のバロンだ」
ブラックエンジェルズ

その名を聞いた途端、体が震えた。

バロン。その名を持つ男はかつて、スピアの大事な人間を奪つた張本人である。

「俺は……バロンを含む、黒い天使達の奴らが恐れるような力が欲しいと思っていた……奴らの偉そうな態度には呆れていたからな」
ブラックエンジェルズ

ファイが語りだす。

「そんな時……バロンがこの禁忌魔法を教えてきた」

「バロンが？」

「…………奴らの力を借りる事だけはしたくなかったが……奴らが教えた魔法で……奴らを倒せば……いい笑いものになると思ったんだ」

ガハッと血を吐く。

「…………まさかこんな副作用があるとはな……」

スピア達の攻撃だけじゃない、何かのダメージを受けている。

まさか……

「……なあ子供^{ガキ}……こんなこと言つのは可笑しいのかもな」

副作用の効果だらうか、体に皺が増えてこる。

「…………俺死にたくねえよ…………」

そう言つた後、ファイの体はかつての若々しい体ではなく、まるでミライのようになつっていた。

二日後。

ハルジオンの病院でスピアとガンマは休んでいた。

ミハエルの情報によれば、ファイはミライのような体のまま評議院管理下の病院で隔離されているらしい。

息はしてこないが会話をできず、まさに生きる屍になつていた。

「なあ。お前、雷魔法使えたのか?」

「俺も、初めて知りました」

隣のベッドに寝ているガンマと、カーテン越しに会話をする。

「あれは多分、俺の魔法なんですね」

「……どいつの意味だ？」

「俺の刀には、ある人の魂が宿っているんです」

「！？」

「禁忌魔法・魂転生ソウルチエングを知つてますか？」

「ああ。人と人、人と動物の魂を入れ替える魔法だろ。だけど、物に魂が宿るなんて…」

「……その、ある人が使つてた魔法なんです。剣閃や十六夜は」

「じゃあ、お前は……」

「魔力なんてもたないただの子供ガキでしたよ」

しばらく無言が続く。

「妖精フェアリーの尻尾テイルには雷の魔法を使つ奴がいるのか？」

「はい」

「じゃあ、そいつに弟子入りでもして雷魔法を基礎から学ぶんだな

「ええ

「次に会つときには、強くなつてろよ」

「解りました」

シャー

カーテンが開いた。そこには、入院服ではなく普通の服を着たガンマがいた。

「俺の方の怪我は治りが早いからな。先に行くぜ」

「はい。あ、今度フェアリー・テイルに遊びに来てくださいよ」

「わかった。じゃあな」

ガンマが背を向けて、病室から出ていく。

「あ、そうだ。スピアード」

「はい?」

「お前、敬語で喋つてるけど…俺も十四。同じ年だぜ」

そう言い、病室を去つていく。

「同じ年かよ…」

心の中でツッコミながら、睡眠をとる。

退院後、フェアリーテイルの雷の魔導士に弟子入りし

過酷な修行生活を行なつたのは、また別のお話。

六年 前編
・ 完・

スピード＆ガンマバウファイ（後書き）

六年前編完結ですね。

雷の魔導士はラクサスです。

次回からは、ルーシィやらなんやつ出でます。

鉄の森

フェアリー テイル ギルド内

みなさん初めまして。私の名前はルーシィ。

最近ここに入つたばかりの星靈魔導士です

フェアリーテイルつてギルドはとにかくいつもドンチャラン騒いで、
でも、とても楽しいギルドなの。

今もナツビグレイが大喧嘩。

あれ? わたし出ていった口キが戻ってきた?

「ナツ! グレイ! マズイぞ! ...」

「 「あ?」

「エルザが帰つてきた! !」

「 「ええ――――――――? ? ? ?」

え? ちょっと... 何? ギルドの中が急に慌ただしくなつてゐんですけど。

ズシン! ズシン! ズシン!

何、この足音。

みんなの顔が引きつってるんだけど??

そして、入口から大きな角を抱えた赤い髪の女性が入ってきた。

「今戻った。マスターはおられるか?」

「お帰り!!マスターは定例会よ」

赤い髪の女性の問いにミラが答えた。

「ミラさん。今はギルドの看板娘だけど、昔は相当暴れてたらしいの。

「エルザ…その、バカでかいのは何なんだ?」

エルザと呼ばれた女性に話しかけたのは、マックス。

砂の魔法を使うの。

「ん?これが…討伐した魔物の角に、地元の者が飾りを施してくれてな……綺麗だったのでここへの土産にしようと思つてな……迷惑か?」

「い…いえ!滅相もない!!」

両手を振りながら、マックスが後ろに下がっていく。

「それよりお前たち!」

エルザ声に、ギルド内が静まつた。

「また、問題を起していいようだな。マスターが許しても私は許さんぞーー。」

ヒィイイツと何処からか聞こえたのは気のせいかしら?

「力ナ！」

۱۰۷

「なんという格好で飲んでいる！コップを使え！」

「ビジターノ！」

「ピケッ！」

「踊りなら外でやれ！」

ワカバ!

ੴ ਸਤਿਗੁਰ

吸殻が落ちて いるぞ！ 少しは禁煙 しろ！」

「ナブ！」

۱۰۰

「依頼板の前をウロウロするなら仕事に行け！」

「マカオー！」

「はい？」

「すまん間違えた」

「間違えるなよ……」

「まったく……世話がやけるな。今日のところも言わずにあつてやるわ！」

「ずいぶんいろいろ言つてたよくな……

「な……何、この人

「エルザー……とつても強いんだ！」

この猫はハッピー、世にも奇妙な喋る猫なの。

この前ハッピーのことを見つたら

「スピアの刀も喋るよ……」

って。何言ってんのか分からないうわ。

「といふで、ナッシグレイはいるか？」

「あい」

ハッピーが指さす方向に、肩を組んだナッシグレイがいた。

「や……やあ、エルザ……オレたち今日も仲良し……良く……や……やつてゐ
ぜ……」

「あい……」

「ナツがハッピーみたいになつた……」

あのナツが？信じられない！

「やうか……親友なら時にはケンカもあるだらう……しかし、私はそつ
やつて仲良くなつてゐるとこを見るのが好きだぞ」

「あ……いや……こつも言つてゐるナビ……親友つてわけじゃ……」

「あい……」

こんなナツ見たことないわ……

「ナツもグレイもエルザが怖いのよ」

「////やんー」

「ナツは昔、ケンカを挑んでボ「ボコ」にされたやつたの」

「まさかあー？あのナツが！？？」

「グレイは裸で歩いているとこを見つかつてボコボコ……」

「それは自業自得な……」

「ロキはエルザを口説ひつとして半殺し」

「……」

「でも、エルザも昔ボコボコにされた事があるのよ」

「誰ですか?」

「スピアード・フルミネ……今は仕事でいいけど」

スピアード。何か名前からして怖そうな……

「一人とも仲が良さそうによかった……」

「実は一人に頼みたいことがある」

「?」

「仕事先で少々やつかいな話を耳にしてしまった。本来ならマスターの判断をおおぐトコなんだが……早期解決がのぞましいと私は判断した」

「二人の力を貸してほしい……スピアも後から合流する……ついてきてくれるな」

「え?」

「はい!?」

ナツとグレイが声を上げると、ギルドが騒がしくなった。

「ど…どいつ事…?」

「あのエルザがスピア以外を誘つなんて初めてじゃないか…」

「こんな角もつ怪物倒す女だぞ…」

騒がしい中、エルザが言つた。

「出発は明日だ…準備しておけ…詳しへは移動中に話す」

「「行くなんて言つてねえ～～」「

「行かないのか？」

凄い形相でエルザが睨む。

「「行きます！」

「エルザとスピア。一人だけでも最強なのに…ナツとグレイ…」

「どうしたんですか、ミラさん?」

「これって…フェアリー・テイル、最強チームかも…」

マグノリア駅 列車内

「あ…あの…お客様…」

乗務員の一人が爆睡している青年に声をかけている。

「ガアアアアアアア… プスウウウウツツツ」

すんごい寝てる。起こすのが忍びない。

「お客様……終点ですよ…」

「すまない」

乗務員の後ろから声がした。

「ウチのギルドの者だ」

「あ、エルザさん。そうでしたか」

エルザは、爆睡する青年を担ぎ列車を降りた。

「すまない。エルザ」

列車で爆睡していた青年、スピアードは頭をかきながら言つ。

俺がフェアリー・テイルに入つてもう六年になる。

「気にするな。こつものことだ」

いや、気にしますけどね…

ナツ達が待っているのは、線路を挟んだ向こう側のホーム。

なんかナツヒグレイ、ケンカしてんな。

ハッピーと…誰だあの娘？^コ

「すまない待たせたか？」

エルザが声をかける。

「荷物多っー！」

凄いシッ ハリだな、田玉でてるわ。

とてもマネできん。

「ん？君は昨日、ギルドにいたな…」

「新人のルーシィと聞いてます。ハリさんに頼まれて、同行する事になりました。よろしくお願ひします」

なるほど新人か。てか、胸大きいな…

「私はエルザだ。よろしくな

「あ、俺スピアードだ。よろしくなルイージ

「いや…あの…ルーシィです…」

ルーシィ？もうじりつけでもいいや。

「そりゃ……ギルドの連中が騒いでいたのは君の事か。雪山に住む地面を掘る変態傭兵、ゴリラの息子を倒したとかなんとか……頼もしいな」

「何か色々混ざります！」

やるなルイージ！！

「今日は、少々危険な橋を渡るかもしれないが、君なら大丈夫だな」

「危険…………？」

危険なのかー俺も聞いてないぞ。

「何の用事かはしらねえが、今回まつこでつてやる……条件つきでな

条件？

「バ……バカ……オ……オレはエルザの為なら無償で働くぜ……」

グレイ怖がりすぎだろ。

エルザなんてカワイイもんだぜ。

「帰つてきたらオレと勝負しろ……！」

「…………えつ？」

ルイージ……じゃなかつたルー・シイ、ハッピー、グレイ

もちろん俺も驚いた。

「あの時とは違う…今ならエルザを倒せる…それにスピアー！お前もだ…！」

え、俺も？

「オ…オイ…はやまるな…死ぬぞ…絶対…！」

グレイ、落ち着けよ…

「確かにお前は成長した。私は、こわさか自信がないが…いいどう受け立つ」

「俺は、遠慮しつくわ

「何だスピア、俺にやられるのが怖いのか？」

「なわけあるか。俺は、この後もすぐ仕事に行くんだ…お前と戦つてゐ暇なんかねえよ。それにお前、俺に一度も勝つたことねえだろ！」

「だからやるんだ！」

「よさないかなッ。スピアはお前ほど暇じゃないんだ…グレイも私と戦いたいのか？」

「ブンブン」

首飛んでいくぞ、そんなに振つたら。

列車内

「はあ…はあ…はあ…」

凄く酔つてゐるな、ナツ。

いや、俺は酔わないけどな何だか眠い……

「あ、あの…スピアードさんまだここ行つたんですか？」

エルザ、グレイ、ハッピーが指で上を指す。

「グウウウウウウウウスピイイイイイイツツ」

「寝てる…！」

列車の金網でスピアードが寝ている。

「スピアは乗り物に乗ると何故か寝てしまうんだ

寝てしまつただ…

「仕事が終わるたびに駅に迎えにいかないと、一生帰つてこないんだよー！」

「//トちゃんが迎えに行くのがほととどだな

ましな人だと思ったのに、やっぱりフュアリー・テイルの一員だね…

「もういや…あたし…フュアリー・テイルでナツ以外の魔法見たことないかも。ヒルザさんはどんな魔法を使うんですか？」

「ヒルザでいい」

「ヒルザの魔法はキレイだよ！血がいっぱいであるんだ！相手の

「キレイなの？それ…」

想像すると…恐い…

「スピアの魔法は雷属性の中で最も破壊力を持つ、紫電を使うんだ…見せたほうがいいだろ？」

いや、でもスピアードさん。寝てますよ…

目の前にスピアの右手が現れ、紫色の雷が鳴る。

「ヒィィイー！」

「スピアは寝ても話は聽けるんだよー。」

なんて能力…

「グレイの魔法の方が綺麗だよー。」

あれ、今どこから声が？

「セウカ？」

そう言ってグレイは左の手の平に右の拳を合わせて、冷氣を集中させた…

そこには、フロアリー・テイルのマークが氷で作られていた。

「うわあつー

「氷の魔法だよー。」

また、声が…

「あの、グレイ。さつきから変な声しない?」

「変な声?」

「アレのことじやないのか?」

エルザが囁つ。

「ああ」

グレイは真上を指した。

「スピアが背負つてる刀があるだろ。あが喋つてんだ

「うわあおおおーーーー。」

「嘘じゃないよ」

え？

真上を見て話かける。

「本当に？」

「本当だよ」

「私たちも初めて知った時は驚いた」

いやいや、驚くってレベルじゃないでしょ……

「どうでもいいけど、そもそも本題にはいろはモルザ……」

「どうでもよくない……！」

「一体、何事なんだ？お前が人の力を借りるなんて、よほどだぜ」

「そうだな……話しておこう……」

エルザの膝で沈むナツに目をやり、話し始めた。

「先の仕事の帰りだ。オニバスで魔導士の集まる酒場に寄った時、少々気になる連中がいてな……」

エルザの回想

「『ハラア……酒遅せえぞ……』

席に座り、オーバス特製ケーキを食べていると男の声が聞こえた。

「つたくよお、なにモタモタしてんだよ……。」

「す……すこません」

その男はネズミ顔の大男だった。

「ビアード、そうカツカすんな」

「うん……」

同じテーブルに座っている葉巻を吸っている男と、太った男が声を上げる。

「これがイラつかずにいれるかつてんだ!! セつかくララバイの隠し場所を見つけたつてのに、あの封印だ!! 何なんだよ!! まったく解けやしねえ!!」

「バカ……声がでけえよ……」

「うふ、うぬせ……」

「くそお……」

「あの魔法の封印は人数がいれば解けるなんてもんじやないよ……」

「あ?」

四人の中で、今まで黙っていた男が声を上げた。

「後は僕がやるから、みんなはギルドに戻つてるといよ……エリゴールさんに伝えといて。必ず三日以内にララバイを持って帰るつて」

「マジか！？解き方を思いついたのか？」

「おおー…さすがカゲちゃん…！」

すると、カゲと呼ばれた男は酒場を出ていった…

氣のせいか、その後を黒フードの男が尾行つけていた。

エルザが話終わった。

「ララバイ？」

「子守歌…眠り魔法か何かかしら？」

「わからない…しかし、封印されているという話を聞くと、かなり強力な魔法だと推測できる」

「話が見えてこねえな…得体の知れねえ魔法の封印を解こうとしてる奴等がいる……だかそれだけだ。仕事かもしれねえし、なんて事ねえ」

「馬鹿だな、グレイ」

真上から声がした。

「「ひねつー・スピアー起きたなら言えよー・ビックリするだらうがー・」

「ビックリせぬつもりで言つたんだよ。ヒリゴールだぞ、死神エリゴール」

列車がオーバス駅についた。他の乗客が荷物を持ち、下車している。エルザ達も、荷物を持ち列車を降りる。

「魔導士ギルド鉄の森のエース、死神エリゴール」

「し…死神！？」

ルーシイ驚き過ぎたる。ビビリルーシイ略してビリー…

「ああ。暗殺系の依頼ばかりを遂行し続けついた字だ…本来、暗殺依頼は禁止されているんだが、奴らは金を選んだ」

「暗殺依頼…」

「そんなもん、依頼する奴がいる時点で許せねえな…」

そう言い、エルザに目を向ける。

話すのが疲れたから、代われサインだ。

「結果、六年前に魔導士ギルド連盟を追放され現在は闇ギルドとい

うカテ「」に分類されている…」

闇ギルド。俺がこの世で一番嫌いなもんだ。

「闇ギルドおーーー?」

「ルーシー汁いつぱいでてるよーーー。」

「汗よーーー。」

汗なのか。俺も汁かと……

「なるほどなあ…」

グレイ…服きろよ…

「ちょっと待つてーー追放つて、処罰はされなかつたのーー?」

「されたさ。当時、鉄の森のマスターは逮捕され
ギルドは解散命令を出された…しかし。闇ギルドと呼ばれているギ
ルドの大半が解散命令を無視して活動し続けているギルドの事な
れ」

「……帰らつかな…」

「出た…」

「不覚だつた…あの時、Hリゴールの前に立つていれば
全員、血祭りにしてやつたものを…ーー。」

「ヒィイイ！」

「そうか…その酒場にいた連中だけなら、エルザ一人で何とかなつたかもしけねえ…だがギルド丸々相手となると…」

グレイの目線が俺に向ぐ。

「いや…鉄の森は正規ギルドの頃から、数が多いので有名だつたギルドだ。流石に俺でも、一人でではキツイな」

スピアの言葉にエルザは頷く。

「奴らはララバイなる魔法を入手し、何かを企んでいる…私はこの事実を看過することはできないと判断した…」

「鉄の森に乗り込むぞ…！」

「面白そつだな」

「新しい技でも、見せてやるよ」

「新しい技なんかないでしょ…」

エルザ、グレイ、スピア、そして刀のアオイの順で言った。

「来るんじゃなかつた…」

ルーシイが肩を落とす。

「汁出すぎだつて」

「汁言うな…」

「で…鉄の森の場所は知ってるのか?」

「それを、この町で調べるんだ」

「雲をつかむような話だな…」

「あれ?」

「どうしたの?ルーシイ」

町を歩いていると、ルーシイが何かに気付いたように声を上げた。

「嘘でしょー?…ナツがいないんだけど…!…!…!

「…」「あ…」「…」「…」

俺、エルザ、グレイ、ハッピーも気付いた。

あ～～～!!…忘れてたああああ!!…

「話に夢中になるあまりナツを置いてしまった…私の過失だ!
とりあえず、私を殴つてくれないか!!」

毎度のことだが、真面目だな…エルザ…

「という訳だ!列車を止めろ…!」

「え… もうこの辺？」

エルザ… こきなり駅員にそんな事言つても…

「フフアリー・テイルの人はやつぱ、みんな、こーゆー感じなんだあ…」

「オイーおれはまともだぞ…」

いや、グレイ服着りよ…

「仲間の為だ、分かつてほしい」

「無茶言わんで言わんて下わいー降りそくなつた客一人の為に、列車を止めるなんて！」

エルザが駅員の後ろにあるレバーに手をやる。

『緊急停止信号』

おい…まさか…

「ハッピー」

「あいわーー」

「うふふとお…」

ジココリコココ

激しいベルの音が響く。

「よし、ナツを追つぞ……すまない、荷物をホテル チリまで頼む」

いや、駅員に頼むなよ。

列車を走つて追うのは無理だよな……つて、

「エルザ……あの魔導四輪を使おう……」

駅前に止まつていた魔導四輪に飛び乗る。

エルザが運転席に、ルーシイとハッピーも慌てて乗る。

「おい！オレ乗つてねえぞ……」

グレイが屋根に飛び乗る。

「飛ばすぞ……」

エルザ…飛ばしそぎだ……あれ？何だか眠くなつてきた…
「俺の車～～～！」

そんな声が聞こえた気がした。

鉄の森（後書き）

なんか俺も眠くなってきた……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4769z/>

FAIRYTAIL～過去の記憶は未来の希望へ～

2011年12月25日22時56分発行